

## 拠点形成研究交流報告：アルゼンチン拠点 国立乳酸菌研究所

### Julio Villena 博士が東北大学農学研究科を訪問：セミナー、共同研究の打ち合わせを実施

アルゼンチンの研究拠点である国立乳酸菌研究所より、Julio Villena 博士が、7月23、24日に東北大学青葉山新キャンパスで開催された東北大学知のフォーラム Stage 1「Frontiers in Agricultural Immunology」において、講演「Immunobiotic-host interactions in the post-genomic era: perspectives and applications in the improvement of antiviral immunity in humans and animals」をされました。アルゼンチン乳酸菌研究所と東北大学農学研究科は、乳酸菌を用いた腸内微生物環境の改善および、それによる感染症および炎症の予防を目的とした、これまで約10年間の共同研究を実施しており、現在、その作用機序の完全解明を目的とした、より分子免疫学的な研究を精力的に実施しております。中でも、乳酸菌を経口投与することによる、腸管での自然免疫系に与える影響を解析することを目的とした研究は、これまで数多くの国際共同発表論文として公表するに至っており、今後のさらなる発展が期待されています。今回、Villena 博士の訪問に合わせ、同じく東北大学知のフォーラムに参加するために来日された、自然免疫研究の世界的権威である Jean-Marc Reichhart 先生(フランス)および東北大学薬学研究科の倉田祥一郎先生(研究拠点形成事業メンバー)にも同席頂き、今後の乳酸菌を用いた、農免疫領域における自然免疫研究のさらなる発展を目指した打ち合わせを実施しました。2011年に、自然免疫研究がノーベル医学・生理学賞の受賞の対象になってから、早いもので6年の月日が経過しましたが、自然免疫研究は、農学分野においても非常に重要な位置付けであること、さらには、今後、農学領域ならではの自然免疫研究の発展に何が必要であるのかを、参加者全員が確認し合いました。

アルゼンチン国立乳酸菌研究所には、研究拠点形成事業での5年の間に、研究者・大学院生が複数回訪問し、国際共同研究をさらに発展させていくこととなります。引き続き、国際共同研究をご支援下さる、日本学術振興会研究拠点形成事業に深く感謝申し上げます。

文 感染免疫ユニット 野地智法

